

アメリカ合衆国における「説明文のための読むことのスタンダード」に関する考察 —理由や根拠によって支えられているかの吟味—

A Study of Reading Standards for Informational Text in Common Core State Standards for English Language Arts: Assessing Whether the Reasoning is Sound and the Evidence is Relevant and Sufficient to Support the Claims

堀江 祐爾*
HORIE Yuji

本論の目的は、アメリカ合衆国の全国共通スタンダードの「説明文のための読むことのスタンダード」に示された「根拠と理由によって支えられているかの吟味」に関する項目の分析と考察を行い、それを通して日本の国語科教育における説明文教材の学習指導の課題を明らかにすることである。

2010年6月に公表された Common Core State Standards for English Language Arts & Literacy in History/Social Studies, Science, and Technical Subjects に示された Common Core State Standards for English Language Arts 中の「説明文のための読むことのスタンダード (Reading Standards for Informational Text)」を取り上げる。そして、項目「知識と思考の統合 (Integration of Knowledge and Ideas)」の8「根拠と理由によって支えられているかの吟味」を取り上げ、幼稚園から社会人の事項を並べ、その構成、ステップの意味などについて分析・考察を行った。その分析・考察を踏まえて、日本の国語教育のあり方についての課題を提示した。

「説明文のための読むことのスタンダード」の特徴として、【5.「理由や根拠によって支えられているかの吟味」に関する考察】の「5.1 全体的なことがらについて」において、次の2つのことがらを挙げた。

- 理由が効果的であるか、根拠が明確であり主張を十分に支えるものであるかの吟味が求められている
- 12年間の最終到達点が示されている

また、「5.2 学年を追ってのステップについて」において、次のような特徴を挙げた。

- 幼稚園段階から第1学年においては話し言葉を用いた指導が行われる
- 第2学年からは書くことを含む学習活動が始まる
- 第3学年から第5学年では応用的な学習指導が始まる
- 第6学年から第8学年では本格的な学習活動が始まる
- 第9学年から第12学年ではより複雑な要約指導に向かう
- 「大学進学および就職準備における読むことのスタンダード」では最終形態が示される

「6. 日本の国語科教育における説明文の指導に関する課題」において、次のような課題を提示した。

- (1) 12年間以上の国語科カリキュラムの作成を
- (2) 「根拠に基づく (evidence-based)」学習指導に関する12年間のステップを示したものが必要
- (3) 「(主張と) 関係のない根拠がどこにあるかを判別する」学習活動も必要

キーワード：全米共通スタンダード、国語科のスタンダード、説明文のための読むことのスタンダード、理由や根拠によって支えられているかの吟味

Key words : Common Core State Standards for English Language Arts, CCSS, Reading Standards for Informational Text, assessing whether the reasoning is sound and the evidence is relevant and sufficient to support the claims

1. 研究の目的

本論においては、アメリカ合衆国において2010年6月に公表された Common Core State Standards for English Language Arts & Literacy in History/Social Studies, Science, and Technical Subjects (CCSS, 全米共通スタンダード) に示された Common Core State Standards for

English Language Arts (CCSS for ELA, 以下「国語科のスタンダード」と呼ぶ) の「説明文のための読むことのスタンダード (Reading Standards for Informational Text)」を取り上げ、「理由や根拠によって支えられているかの吟味」に関する項目について、その構成、ステップの意味などについて分析・考察を行う。

日本の教育に目をやると、2016年1月19日に開催された中央教育審議会・教育課程部会・国語ワーキンググループの「資料1」として、「国語科において育成すべき資質・能力（検討のたたき台）」という資料が提示された。^{注1)} その中に、「思考力・判断力・表現力等 教科等の本質に根ざした見方や考え方等（知っていること・できることをどう使うか）」という項目があり、筆頭の事項として次のものが挙げられている。（下線は引用者が添えた。以下同様。）

◆テキスト・情報を理解する力、文章や発話により表現する力

【創造的思考（とそれを支える論理的思考）の側面】

- ▶情報を多角的に吟味し、構造化する力
- ・論理の吟味・構築（根拠、論拠、定義、前提等）
- ・信頼性、妥当性の吟味
- ・既有知識（他教科に関する知識、一般常識、社会的規範や文化等）に基づく吟味、補足、精緻化
- ▶構成・表現形式を評価する力

注目したいのは、下線を添えた「論理の吟味・構築（根拠、論拠、定義、前提等）」というところである。論理的な思考、特に根拠、論拠を明確に示す学習指導の必要性は、これまでも指摘されてきたことである。

こうしたことを受けて、本論においては、「説明文のための読むことのスタンダード」を取り上げ、「理由や根拠によって支えられているかの吟味」に関する項目についての考察を行う。^{注2)}

2. 「全米共通スタンダード」の作成母体と目的

2.1 「全米共通スタンダード」の作成意義

石井英真（2015）は、「全米共通スタンダード」の作成意義について次のように述べている。^{注3)}

近年の米国の教育界のホットトピックである「州共通コアスタンダード（Common Core State Standards）」（以下、コモン・コア）は、まさに21世紀型の学びや高次の学力に焦点を合わせて、目標、カリキュラム、授業、評価、教員養成など、教育システムの総体を一体のものとしてデザインし直すことを企図している。高次の学力を重視するコモン・コアと整合性を持たせるために、少ない内容を深く学ぶことや科学的な検証を経た革新的な教育方法の採用が推奨されるとともに、標準テスト（客観テスト）に代えてパフォーマンス評価を中心に据えたアカウンタビリティ・システムの構築がめざされ、学力を実質的に上げるために、教師による教室での評

価の意義や形成的評価にも注目が集まっている。しかも、「大学とキャリアへのレディネス（college and career readiness）」という学校教育の包括的なゴール（出口）に向けて、K-16の教育の内容・方法・システムを一貫させようとしている（能力面での教育接続）。

全米共通スタンダードは、「21世紀型の学びや高次の学力に焦点を合わせて、目標、カリキュラム、授業、評価、教員養成など、教育システムの総体を一体のものとしてデザインし直すこと」をめざして作成されたスタンダードである。そして、幼稚園段階から高等学校卒業までを見通したものであるところに、大きな特色がある。

2.2 「全米共通スタンダード」の作成母体

今回の「全米共通スタンダード Common Core State Standards for English Language Arts & Literacy in History/Social Studies, Science, and Technical Subjects (CCSS)」は2010年3月に草案が公表され、パブリックコメントを受けた後、6月に正式発表された。「全米州教育長協議会（Council of Chief State School Officers: CCSSO）」と「全米知事会（National Governors Association Center for Best Practices: NGA）」が母体となつてまとめたものである。

なお、2009年には先んじて、「大学進学および就職準備に関するスタンダード（College and Career Readiness Standards: CCRS）」が公示されており、高等学校卒業段階において身につけるべき学力を明示したものととらえることができよう。

1996年に「国語科のためのスタンダード（Standards for the English Language Arts）」が、「国際読書学会（International Reading Association: IRA）」と「全米英語教育者協議会（National Council of Teachers of English: NCTE）」によってまとめられてから、14年ぶりに全国的なレベルのスタンダードが作成されたことになる。^{注4)} 1996年のスタンダードは、わずか12項目のものであったため、本格的な「全米共通スタンダード」が作成されたのは、今回が初めてといってもよいであろう。

2.3 スタンダード作成の目的

全米共通スタンダードに関するインターネット・サイトに掲載されていた Key Points ELA（key point of English Language Arts：国語科スタンダードのキーポイント）に、次のようなスタンダード作成の目的が示されていた。^{注5)}

Today, we have different standards in every state and we need a common core of state standards to ensure all

students, no matter where they live, are prepared for success in college and work.

今日、われわれは各州において異なったスタンダードを用いているが、われわれには、すべての学習者にどこに住んでいようが、大学で学ぶため、社会において働くための準備ができることを保証するための共通スタンダードが必要である。

注目したいのは、「大学で学ぶため、社会において働くための準備」というところである。先に述べたように、全米州教育長協議会と全米知事会とが母体となってスタンダードをまとめたことや、「大学進学および就職準備に関する読むことのスタンダード」が先に公表されたことから、「次世代の経済力を支える人材養成」を目的としたスタンダードと捉えることができよう。

3. 「国語科のスタンダード」の構成

3.1 6つの領域から構成されている

スタンダードは6つの領域から構成されている。

- 1) 文学のための読むことのスタンダード (Reading Standards for Literature)
- 2) 説明文のための読むことのスタンダード (Reading Standards for Informational Text)
- 3) 読むことの基礎的スキルのスタンダード (Reading Standards: Foundational Skills)
- 4) 書くことのスタンダード (Writing Standards)
- 5) 話すことと聴くことのスタンダード (Speaking and Listening Standards)
- 6) 言語のスタンダード (Language Standards)

「文学のための読むことのスタンダード」と「説明文のための読むことのスタンダード」があることに注目したい。これまでのアメリカの国語教育においては、説明文 (Informational Text) も文学 (Literature) の一形態ととらえることが多かったが、このスタンダードでは明確に区別されている。PISA 調査や全米学力調査 (NAEP) の影響もあろう。^{注6)}

3.2 「読むことのスタンダード」の4つの枠組み

「読むことのスタンダード」の事項は、幼稚園から第12学年 (高等学校3年相当) まで、次の4つの枠組みのもとに分類されて示されている。^{注7)}

- A 重要な考えや細部 (Key Ideas and Details)
- B 技法や構造 (Craft and Structure)
- C 知識と思考の統合 (Integration of Knowledge and Ideas)
- D 文章の複雑性の幅とレベル (Range and Level of Text Complexity)

これらは「文学のため」「説明文のため」の両方の「読むことのスタンダード」に共通している。また、「大学進学および就職準備に関する読むことのスタンダード」にもこれらの項目が使われており、幼稚園から社会人までを貫くものとなっている。

3.3 4つの枠組みの10の下位項目

「読むことのスタンダード」は、先に示したA~Dの4つの枠組みのもとに、次の1~10の下位の事項が位置づけられた構成となっている。なお、下位の事項名は論者がまとめたものである。

- A 重要な考えや細部 (Key Ideas and Details)
 1. 詳細な読みと根拠の引用
 2. テーマ・要旨の読み取りと要約
 3. 登場人物や出来事などの関係の把握
- B 技法や構造 (Craft and Structure)
 4. 技法と意味の把握
 5. 文章の構造の把握
 6. 視点と内容の関係の把握
- C 知識と思考の統合 (Integration of Knowledge and Ideas)
 7. 形式やメディアとの関係の把握
 8. 根拠と理由によって支えられているかの吟味
 9. 比べ読みによる分析
- D 文章の複雑性の幅とレベル (Range and Level of Text Complexity)
 10. 文章の選択の適切性の把握

4. スタンダードのステップに関する考察—項目

「理由や根拠によって支えられているかの吟味」—本論においては、「説明文のためのスタンダード (Reading Standards for Informational Text)」の項目C「知識と思考の統合 (Integration of Knowledge and Ideas)」の8「根拠と理由によって支えられているかの吟味」を取り上げ、幼稚園から大学進学および就職準備段階まで並べ、そのステップの様相について考察する。

4.1 幼稚園から第2学年までの「理由や根拠によって支えられているかの吟味」

【Kindergartners：幼稚園】

8. With prompting and support, identify the reasons an author gives to support points in a text.

励ましやサポートを受けながら、文章において筆者が示した理由が説得力を高めていることについて考える。

【Grade 1 students：第1学年】

8. Identify the reasons an author gives to support points in a text.

文章において筆者が示した理由が説得力を高めていることについて考える。

【Grade 2 student：第2学年】

8. Describe how reasons support specific points the author makes in a text.

文章において筆者が示した理由が特に説得力を高めていることについてまとめる。

【考察】

幼稚園段階から第2学年まで、共通して、「筆者が示した理由が説得力を高めていること (the reasons an author gives to support points in a text)」について考えさせる。理由の効果に着目させるということが、低学年から重視されていることに注目したい。

幼稚園段階においては、おそらく読み聞かせなどの形をとりながら、「筆者が示した理由が説得力を高めていること」を考え、見つけさせる。

第1学年では、ある程度自分の力で読み取り、「筆者が示した理由が説得力を高めていること」について考えさせる。幼稚園段階と第1学年においては、「考え、見つけ (identify)」たことを話し言葉によって表現させるにとどめられ、書かせることは重視されない。

第2学年では、「文章において筆者が示した理由が特に説得力を高めていること」について、「(書き)まとめる (describe)」学習活動へと展開される。また、reasonsと複数の理由があることに着目させる。

4.2 第3-5学年の「理由や根拠によって支えられているかの吟味」

【Grade 3 students：第3学年】

8. Describe the logical connection between particular sentences and paragraphs in a text (e.g., comparison, cause/effect, first/second/third in a sequence).

文章における特定の文や段落の論理的関係 (例えば、比較、因果関係、一つ二つ三つなどの順序) をまとめる。

【Grade 4 students：第4学年】

8. Explain how an author uses reasons and evidence to support particular points in a text.

文章における特定のことがらを支えるために理由や根拠を筆者がどのように使ったかを説明する。

【Grade 5 students：第5学年】

8. Explain how an author uses reasons and evidence to support particular points in a text, identifying which reasons and evidence support which point(s).

文章における複数の特定のことがらを支えるために理由や根拠を筆者がどのように使ったかを、どの理由や根拠がどのことがらを支えているかについて判別しながら、説明する。

【考察】

第3学年では、「比較、因果関係、一つ二つ三つなどの順序 (comparison, cause/effect, first/second/third in a sequence)」などの「特定の文や段落の論理的関係 (the logical connection between particular sentences and paragraphs in a text)」を示す文章表現について考えさせる。

第4学年では、「理由や根拠を筆者がどのように使ったか (how an author uses reasons and evidence to support particular points in a text)」を説明することが求められる。第4学年から、「理由と根拠 (reasons and evidence)」の両方が用いられる。

第5学年では、「複数の特定のことがら (point(s))」となっていることに注目したい。「理由や根拠」が支えるものが複数存在する場合もあるということである。

4.3 第6-8学年の「理由や根拠によって支えられているかの吟味」

【Grade 6 students：第6学年】

8. Trace and evaluate the argument and specific claims in a text, distinguishing claims that are supported by reasons and evidence from claims that are not.

主張が理由や根拠によって支えられているか、いなかを判別することも含みながら、文章中の議論や特定の主張について位置づけ評価する。

【Grade 7 students：第7学年】

8. Trace and evaluate the argument and specific claims in a text, assessing whether the reasoning is sound and the evidence is relevant and sufficient to support the claims.

理由が効果的であるか、根拠が明確であり主張を十分に支えるものであるかを吟味しながら、文章中の議論や特定の主張について位置づけ評価する。

【Grade 8 students：第8学年】

8. Delineate and evaluate the argument and specific claims in a text, assessing whether the reasoning is sound and the evidence is relevant and sufficient; recognize when irrelevant evidence is introduced.

理由が効果的であるか、根拠が明確であり主張を十分に支えるものであるかを吟味しながら、文章中の議論や特定の主張について説明し評価する。(主張と)関係のない根拠が使われていないかどうか判別する。

【考察】

第6学年では、「主張が理由や根拠によって支えられているか、いなかを判別すること (distinguishing claims that are supported by reasons and evidence from claims that are not)」が加わる。

第7学年では、「理由が効果的であるか、根拠が明確であり主張を十分に支えるもの (whether the reasoning is sound and the evidence is relevant and sufficient)」で

あるかを吟味させる。

第8学年では、「理由が効果的であるか、根拠が明確であり主張を十分に支えるものであるか (whether the reasoning is sound and the evidence is relevant and sufficient)」を吟味させることに加え、「(主張と) 関係のない根拠が使われていないかどうか判別する (recognize when irrelevant evidence is introduced)」ことが求められる。

4.4 第9-12学年の「理由や根拠によって支えられているかの吟味」

【Grade 9-10 students：第9-10学年】

8. Delineate and evaluate the argument and specific claims in a text, assessing whether the reasoning is valid and the evidence is relevant and sufficient; identify false statements and fallacious reasoning.

理由は正当か、根拠は関係性があり効果的かを吟味しながら、文章における議論や特別な主張をまとめ、評価する。間違った意見や間違った理由を判別する。

【Grade 11-12 students：第11-12学年】

8. Delineate and evaluate the reasoning in seminal U.S. texts, including the application of constitutional principles and use of legal reasoning (e.g., in U.S. Supreme Court majority opinions and dissents) and the premises, purposes, and arguments in works of public advocacy (e.g., The Federalist, presidential addresses).

憲法の条文の適用や法的な見解の使用 (例えば、米国最高裁判所の多数意見と異論) や公的な見解 (例えば、The Federalist 紙における大統領演説) についての前提、目的、論点などを含みながら、アメリカの公的な文書における理由づけをまとめ、吟味する。

【考察】

第9-10学年では、「理由は正当か、根拠は関係性があり効果的か (whether the reasoning is valid and the evidence is relevant and sufficient)」を吟味するというかなり高度な課題が提示される。さらに、「間違った意見や間違った理由を判別する (identify false statements and fallacious reasoning)」ことが求められる。

第11-12学年では、「米国最高裁判所の多数意見と異論」や「大統領演説」など、「アメリカの公的な文書」が教材として取り上げられ、「理由づけをまとめ、吟味する (delineate and evaluate the reasoning)」学習活動が展開されるところに注目したい。教材として、「米国最高裁判所の多数意見と異論」や「大統領演説」が取り上げられるところにも、アメリカらしいところが見て取れよう。

4.5 大学進学および就職準備段階における「理由や根拠によって支えられているかの吟味」

【College and Career Readiness Standards for Reading (大学進学および就職準備に関する読むことのスタンダード)】

8. Delineate and evaluate the argument and specific claims in a text, including the validity of the reasoning as well as the relevance and sufficiency of the evidence.

理由の効用に加え根拠の関連性や充足性についても考えながら、テキスト中の議論や特別な主張をまとめたり、評価したりする。

【考察】

「大学進学および就職準備に関する読むことのスタンダード」においては、「理由の効用に加え根拠の関連性や充足性についても考えながら、テキスト中の議論や特別な主張をまとめたり、評価したりする」という一連のステップの最終形態が示されている。

5. 「理由や根拠によって支えられているかの吟味」に関する考察

考察を通して、「説明文のための読むことのスタンダード」の「理由や根拠によって支えられているかの吟味」に示された事項が、幼稚園から社会人までステップを踏んで展開されていることを明らかにした。以下に考察をまとめる。

5.1 全体的なことからについて

○理由が効果的であるか、根拠が明確であり主張を十分に支えるものであるかの吟味が求められている

「理由が効果的であるか、根拠が明確であり主張を十分に支えるものであるかを吟味すること (assessing whether the reasoning is sound and the evidence is relevant and sufficient)」が求められている。つまり、根拠にもとづく (evidence-based) ことが重視されている。

○12年間の最終到達点が示されている

「大学進学および就職準備に関する読むことのスタンダード」においては、「理由の効用に加え根拠の関連性や充足性についても考えながら、テキスト中の議論や特別な主張をまとめたり、評価したりする」という一連のステップの最終形態が示されている。12年間の最終到達点が明示されているところに注目したい。

5.2 学年を追ってのステップについて

○幼稚園段階から第1学年においては話し言葉を用いた指導が行われる

「筆者が示した理由が説得力を高めていること (the reasons an author gives to support points in a

text)」について考えさせる。理由の効果に着目させるということが、幼稚園段階から重視されていることに注目したい。

幼稚園段階から第1学年においては、話し言葉を用いて「考え・見つける (identify)」という学習活動に重点が置かれる。英語は綴りと発音の関係に例外が多いため、文字の読み書きの指導がゆっくりとなされるためであろう。

- 第2学年からは書くことを含む学習活動が始まる
第2学年から「(書き)まとめる (describe)」させる学習活動へと展開される。書くことについての指導はじっくりと展開される。また、reasons と複数の理由があることに着目させる。
- 第3学年から第5学年では応用的な学習指導が始まる
第3学年から第5学年においては、「比較, 因果関係, 一つ二つ三つなどの順序 (comparison, cause/effect, first/second/third in a sequence)」などの「特定の文や段落の論理的関係 (the logical connection between particular sentences and paragraphs in a text)」を示す文章表現について考えさせることが始まり、「理由や根拠を筆者がどのように使ったかを説明する (how an author uses reasons and evidence to support particular points in a text)」という応用的な学習指導が始まる。また、第4学年から、「理由と根拠 (reasons and evidence)」の両方が用いられる。
- 第6学年から第8学年では本格的な学習活動が始まる
第6学年から第8学年では、「理由が効果的であるか、根拠が明確であり主張を十分に支えるものであるか (whether the reasoning is sound and the evidence is relevant and sufficient)」を吟味させる。特に、第8学年では、「(主張と) 関係のない根拠が使われていないかどうか判別する (recognize when irrelevant evidence is introduced)」ことが求められる。
- 第9学年から第12学年ではより複雑な要約指導に向かう
第9-10学年では、「理由は正当か、根拠は関係性があり効果的か (whether the reasoning is valid and the evidence is relevant and sufficient)」を吟味するというかなり高度な課題が提示される。さらに、「間違っただ意見や間違っただ理由を判別する (identify false statements and fallacious reasoning)」ことが求められる。
第11-12学年では、「理由づけをまとめ、吟味 (define and evaluate the reasoning)」する学習活動が展開される。
- 「大学進学および就職準備に関する読むことのスタンダード」では最終形態が示される
「大学進学および就職準備における読むことのスタンダード」においては、「理由の効用に加え根拠の関

連性や充足性についても考えながら、テキスト中の議論や特別な主張をまとめたり、評価したりする」という一連のステップの最終形態が示されている。

6. 日本の国語教育における説明文の指導に関する課題

本論における「説明文のための読むことのスタンダード」に関する分析・考察を通して見えてきた、日本の国語教育における説明文の指導に関する「課題」をまとめる。

(1) 12年間以上の国語科カリキュラムの作成を

国際的な視野からみたとき、12年間以上の螺旋的なステップアップを行うカリキュラムの作成が必要である。アメリカの「国語科スタンダード」では、幼稚園段階から大学進学および就職準備段階までを扱っているところに注目したい。

(2) 「根拠に基づく (evidence-based)」学習指導に関する12年間のステップを示したものが必要

理由は正当か、根拠は関係性があり効果的か (whether the reasoning is valid and the evidence is relevant and sufficient) を吟味するということを、ステップを踏んで指導するような構造になっている。日本の国語科においても、「根拠に基づく (evidence-based)」学習指導に関する12年間のステップを示したものが必要であろう。

(3) 「(主張と) 関係のない根拠が使われていないかどうか判別する学習活動も必要

日本の国語科教育においては、「(主張と) 関係のない根拠が使われていないかどうか判別する (recognize when irrelevant evidence is introduced)」ことは、特に小学校段階においてはほとんど行われていないのではないだろうか。各学年において、こうした学習指導を行いたい。

7. 今後の課題

本論においては、「説明文のための読むことのスタンダード」の一部に焦点を当てた。

このスタンダードがどのような授業実践を求めているのか、また、どのような学力評価が行われるのか、その事例の収集と考察を今後の大きな課題として挙げることができる。

*

言語、文化、制度いずれも異なった国の事例ではあるが、本論における「国語科のスタンダード」の構成とステップに関する考察が、日本の学習指導要領、国語科教育のあり方を見直す視点のひとつとなることを願っている。

〈注〉

- 1) 次の文部科学省のサイトに掲載されている。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/074/siryō/1367634.htm (as of April 24th, 2016)
- 2) 「文学のための読むことのスタンダード」については、次の論にまとめた。
堀江祐爾「アメリカ合衆国における文学のための読むことのスタンダード—Reading Standards for Literature—」(大阪国語教育研究会編、『中西一弘先生傘寿記念論集』, 2012年12月)
- 3) 石井英真 (2015) 『現代アメリカにおける学力形成論の展開 [増補版]』東信堂, p. ii
- 4) 1996年の Standards for the English Language Arts (国語科のためのスタンダード) は、12項目の簡便なものである。これについての考察は、『国語系教科のカリキュラムの改善に関する研究—歴史の変遷・諸外国の動向—』(2002年, 国立教育政策研究所編) にまとめた。なお、「国際読書学会 (International Reading Association: IRA)」は、現在は「国際リテラシー学会 (International Literacy Association: ILA)」と名称が変わっている。
- 5) <http://www.corestandards.org/about-the-standards> にかつて掲載されていた。
- 6) 全米学力調査 (NAEP) については、次の論にまとめた。
堀江祐爾「全米学力調査 (NAEP) から読解力の学力調査を考える」(全国大学国語教育学会編『国語学力調査の意義と問題』明治図書, 2010年に所収)
- 7) アメリカにおいては、小学校の中に「幼稚園クラス (kindergarten class)」が置かれている。

(主な参考文献)

- 石井英真 (2015) 『現代アメリカにおける学力形成論の展開 [増補版]』東信堂
- Common Core State Standards for English Language Arts & Literacy in History/Social Studies, Science, and Technical Subjects (2010) Common Core State Standards Initiative.
- Handbook of Research on Teaching the English Language Arts. (2010) NCTE.
- PISA 2009 Assessment Framework (2009) OECD.
- The Nation's Reportcard NAEP 2008 Trends in Academic Progress. (2009) U.S. Department of Education.